シュレッダー予備軍

志紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シュレッダー予備軍

【Ｎコード】
Ｎ４５８７Ｙ

【作者名】
志紅

【あらすじ】
連載のスピンオフや、色々短すぎる突発話。異世界ファンタジーや予告中心予定。

KAMITUKI

ピピピピピ、と、機械的な音がした。

それに小さくため息をついて、男は鳴りやまぬ小型機械を手に取る。

「……もしもし？」

『ヴァンライド様でございますか？』

「ええ、そうですが。」

『初めまして、私皇子付き秘書のトガネと申します。お噂はかねがね。』

「…どうされました？」

『いえあの、…実は…』

少し戸惑いを含んだ声で秘書が伝えてくる話に相槌を打って、もう一度ため息をついてから男は返事を返した。

「…了解しました。すぐにそちらへ向かいます。」

『ご面倒をおかけいたしまして、申し訳ありません。――ところでヴァンライド様、』

今まで関わらずには来たものの、よくよく振られてきた話臭い切り出し方に男は小さく首を振る。

「…悪いですけど、政治的悪だくみには俺は協力できかねますよ。…ではこれで。」

『あ、ちょ…』

引き止める秘書の声を振り切るようにブツリと通話を切って、男は機械をテーブルに放り投げた。予想より早く時期が来たことにイラ

イラと髪をかき乱すと、ふと違和感を感じて手をおろす。

「―…はぁぁ…、」

右手に絡まった茶黒に、男は深くため息を吐いた。

＊

月の美しい夜だった。

部屋の中央の椅子に座り機嫌良さげにふんふん、と鼻歌を歌うは…金髪の青年――帝国第二皇子リトアイルである。月を見上げて目を細め、何かを待つように目尻を撫でてうっすらと笑う様は明らかに異様であった。けれどそれを指摘する者は既に人払いされたこの部屋にはおらず、青年の小さな笑い声だけが響く。

――青年は機嫌がよかった。何事も全力で楽しむきらいのある彼はそれが常ではあったが、それでも久々に“存在して”いられることに心が浮き立って仕方がない。月の光だけではない…。大いなる力が次第に増しているのを感じる。だからこそ、自分はいつもより早く顕現出来、そして…

「―…おや、思ったよりお早いお越しだ。」

「…わざわざ待っていて頂けるとは光栄だな。」

かの高名なる黒騎士殿が、発現に気付けなかったのだから。

感じた気配と聞こえた声に青年は椅子から優雅に立ち上がり呟いた。振り返った先にいたのは、予想通り憮然とした表情のもう青年とは言い難い見た目の男で、青年はにっこりと微笑んでみせる。

「君はボクのお客人だからね、歓迎するのは当然さ。」

「―…長居する気も、長居してもらう気も全くない。さっさと皇子の体から出て行け。」

剣呑な表情で、殺気を出しつつ青年を睨みつける男。同時に抜かれた剣は月の光を反射して眩しいほどに輝き、青年の顔を微かにゆがめて映し出していた。しかし青年はそんな脅しにも全く頓着せず、呑気に揚げ足をとる。

「それは正しくない言いようだよ？ボクはこの身と完全にリンクしている…一時的に封印することは可能なれど、出て行くなど無理だね。」

そして、と続けながら、青年はふわりと笑い、向かってきた銀の切っ先を交わした。かすかに音を発した空気に揺れた金髪が数本、はらはらと床に着地する。

「――もうすぐ“僕ら”はそれぞれの宿主の体を支配する。それは、…どんなときか分かっているのだろう？大騎士シェル。“僕ら”に唯一対抗しうる男よ。」

歌うように言った青年に男は歯噛みした。相手にすらされていない。その事実ももちろんあるが、それよりも青年が言った言葉に焦りを感じていた。

「…やはり、…」

「ふふふ、そう、時は近い。その時事実に最も近い君はどうするのか、ボクは今から楽しみで仕方がないよ。」

「…余計なお世話だ。」

「あはは、そうだねぇ。――…それにしても、シェル。」

楽しそうに笑った後微かに不思議そうに首を傾げ、いきなり話題を変えた青年に男は眉を寄せる。

「君、本当にマメだよねぇ。」

「…は？」

「いやいや、そこまでヒトが好きなわけでもなさそうな割に、随分とマメにボクの封印に来るよなぁと思ってね。」

「仕方がないだろう。…対抗出来るのは、俺だけなのだから。」

ため息を吐きつつそう言い捨てると、男は一瞬きょとんとした後すぐに吹き出した。――一体何が起きた。というか、どこか面白い所があったのか。

「ぷ、く、ははは…！」

「何が可笑しい。」
「いやいや、――…君には、これから起こり得る事態を見過ごす、という手はないんだなぁ、と思ってねぇ。」
「…黙れ。」
「くくく、…じゃあ今日は、君のその愛国心に免じて大人しく帰るとしようかな。」

「……別に愛国心なんかでは、…というか、は？」

二度目のは、である。笑う青年が自分から帰ると言い出すことなど、これまで一度もなかったことだ。そんなに俺の発言がツボだったのか、と男は眉をひそめた。

青年はそんな男に構わず椅子に腰を下ろしたが、ふと思い出したように顔を上げる。

「あぁ、そうそう…ボクは楽しければ何だっていいからね、これだけ穏和に行くけれど、」

何が穏和なものか、初対面で力試しと嬉々として襲いかかってきたくせにと男は思ったが、表情には出さない。元々鉄面皮で通っているし、青年は気付かなかったようだった。

「――他の連中はこうはいかないよ。彼らは忠誠心に満ち溢れてるからね。……ま、精々、」

頑張ることだと言った怪しい気配が、段々と霧散していく。男はゆるゆると溜め息を吐いてから部屋からきびすを返し、秘書だと言ったトガネに魔法で文を飛ばした。さすがにあの会話の後で平気で話

せる太い根性はしていない。

ギィと音を立ててドアが閉まり、そこに寄りかかって男――シェル・ヴァンライドは静かに笑った。

「――言われなくても、」

“精々”頑張って見せるさともう一度笑って、男は王宮の長い廊下を歩いていった。

KAMITUKI（後書き）

つ　☆　づ　☆　く

…みたいな。

続きはありません（きっぱり）。

お初にお目にかかります。（前書き）

短編「Ｂａｄ　ｔａｓｔ」の少し前の話です。

…ん？

少し綴りが間違っているかも…。

お初にお目にかかります。

「…ということなんだけど、」

理解出来るかい？と、“彼”は言った。

なにしろ寮に戻る途中にいきなり連れてこられた俺は、この状況の意味が分からない。

「…新しいタイプの拉致か？何やら地面が光ったようだったが…。」

「あぁ、そうだったね。まずはこの世界のことを説明しないといけないわけだ。」

ぼそりと呟き続けられた内容は、とうてい信じがたい物だった。

「魔物、魔法、貴族…いったいどんなおとぎ話だそれは。」

「まぁ君たちの世界は近代的だものね。ディファーリアはかなり熱心だし。」

「…そこが一番の疑問なんだが、…えぇと、」

ん？と言いたげな顔で首を傾げる男に、さすがの俺も言いよどむ。

それでも静かに口を開いた。

「神さま、…だと？」

「うん、そうだよ。僕はそこまで力の強い方じゃあ無いんだけれどね。」「…これは現実か？」

あっさり肯定されては逆に理解しがたい。しかめっ面をすると、彼はますます楽しそうに笑みを浮かべた。…まずそこからして疑問なんだ。彼が目の前にいるということその物が。

「―…じゃあ、その自称神様が、」

何のために俺なんかを？

呟いた言葉に、彼は愉快そうに今度ははっきり声に出して笑う。なんかとはまたご謙遜だ、と言って。

「東藍民主主義共和国陸軍第四部隊曹長、通称“狂犬”くん…だったかな？君の武勇伝は全て、僕の頭に入っている。」

「……。」

揶揄するように自分の頭を指さしてから、相変わらず楽しそうに彼は続ける。

「“なんか”というには…余りに華々しくて血生臭い経歴だね？」

からかう視線にため息をついてから、俺も口を開いた。

「全部知られているというのはいい気はしないが…まぁこの際仕様がない。で、あなたは俺にいったい何を求める？」

神だという存在に色々（何故言葉が通じるのかだとかここに連れてきた方法だとか）突っ込むのも野暮だと率直にそれだけを尋ねる。返ってきたのは頼みたいことがあってね、という簡潔な一言だった。

「…神様が、か？」

「だからこそさ。僕では干渉できない、いや…しちゃいけないことでね。“神々”の最大のタブー。だけど、君を介してならギリギリｏｋかと、ね。」

「――なるほど、」

だからこその自分か。ひそりと呟けばどうやら正解だったらしい。その通り、と頷かれた。

「…誰を？」

「いやぁ、明確にこの人を、という訳じゃない。」

ふわり、と彼が浮かべたのは優しげとは言い難い笑み。察しが良くて助かると目を細められ、神様ってこんなものなのかと俺は苦笑した。

「ストーリー通りに、“お話”が進むよう、僕が指定した人を……消してほしいんだ。」

明言。

危険かつ迂闊なことだ。これが俺の世界なら録音されて言質とられて脅されるだろう。それにしても随分月並みな言葉だとぼんやり考えていると、彼は更に続ける。

「異世界より来たる勇者の話を…知っているかい？」

――…きっと俺にこの絶対神からのお願い、否メイレイを拒否する手だてなど無い。出来ても多分犬死にで。

――ならばせめて。

「…聞いたことがないな。」

遠まわしの肯定に、悪趣味な神はその笑みを深めた。

お初にお目にかかります。（後書き）

実は薨のトリップには、神様たちの色んな思惑が絡んでいました。

そこまで書ききれてませんが。

勇者様の受難（前書き）

短編「ｕｎｆａｉｔｈｆｕｌ」スピンオフです。

個人的にずっと書きたかった話。

勇者様の受難

巻き込まないで欲しいと龍斗は思う。

魔王を倒す旅の途中で仲良くなったドラゴンに乗せてもらい、放浪の旅に出てもうすぐ3日がたとうとしていた。…はいそこたいしてたってねえとか言わない。

龍斗はそもそも事なかれ主義である。そのおかげで実は魔王と対決すらしていないが、まぁそれは丸く収まったし今の話には関係ないので置いておくとして。話を戻すと龍斗は出来れば魔王を倒すのも無事終わったことだし、後は一般人として何事もなく悠々自適に暮らしたいと思っていた。

――だが。

“リュート…もしかしたら気付いてたかもしれないけど、あなたこのままだと国の英雄として無駄に祭り上げられるわよ。”

さらりと編み物片手に言って教えてくれたのは、豪胆で知られる巫女…エルクだった。ぶっちゃけ周りの人達の中で一番このmあばばばばば。

…それを聞いてあぁやっぱり、と思ってしまった。そんな空気は自分も少し感じていた。採寸させろと言われたり、何やら急に絵師と面会させられぜひ肖像画をと言われたり、違う国のお偉いさんと対談させられたり。

衣食住を提供してもらっている身で、しかも実際魔王を倒した訳でもない。プラスしてもう一つ負い目のある龍斗は、仕方がないと受け入れていたのだが。――…それが一生続くかもしれないとあらばまた話は別だ。

やらないと殺されかねない雰囲気だったから魔王討伐も引き受けたが、大してこの国に思い入れもない。加えて自分を慕っているような顔をしていた仲間たちも、きっと国から伝えられていたろうに何も教えてはくれなかった。…龍斗が好きなあまり、伝えたら龍斗はこの国を去ってしまうと考えた結果だろうとエルクは言っていたが、真実はわからない。

そうして割とあっさり旅立つ決意をした龍斗に、エルクは更に驚きの発言をしてくれて。

“私も連れて行ってくれない？”

――…巫女エルクがこの国の神であるディアスノア…俗に言う“万能神（ウス）”の妻だというのは、少し前に本人から聞かされた話である。その旦那と何かあったのだと…容易に想像はついた。

理由を聞くとエルクは渋々ながら教えてくれて。――……なんというか…当人たちにとってはそれで済ませていい話ではないのだろうが。

――――これぞまさに、なんとかは犬も食わないと言う奴だなと、龍斗は思った。

「……はぁ…」

ぱちぱちと目の前の焚き火がはぜる音を聞きながら、眠るエルクの横で頭を抱える。

実は昔、というか異世界に来る折りに、龍斗は神に会っている。その時やたら力説されたのが…――エルクという巫女には絶対に手を出すな、ということだった。会ったというか正しくは夢の中に意志だけが流れ込んでくるような感じで、声だとか見た目だとかは知らないのだがまぁその分更にエルク自慢…いや今思えば散々ノロケられてひたすらウザかったのを覚えている。

……だから初めてエリクに会ったとき、好みの巫女様がエルクと名乗ったのに一人撃沈していた訳だが。

その時は巫女だから神に愛されているのだろうと思っていたが…エルクの衝撃告白後、あれはそういうことだったのかと妙に納得してしまった。

――つまり、エルクに自覚はないが、彼女は旦那に相当愛されている。

だから多分、浮気というのも…三流メロドラマじみた理由があるのだろう。

例えば、エルクは若干冷めていてツンデレの気があるので、ヤキモチを焼いてほしかった、とか。それにしてもやりすぎだとは思うが…。

……。

うあぁぁぁ！と叫んで髪をかきむしる。なんか色々とそろそろ限界である。悪いのは旦那の方だが、これ以上バカップル…否バカ夫婦の痴話喧嘩に巻き込まれたくはない。

だいたい非リア充男子にラブラブっぷりを逆に見せつけるんじゃねぇ！と叫びたかったが、これ以上大騒ぎするとエルクが起きるのでやめておく。

「あぁもう、ホント…別世界でも何でもいいから、助けてくれよ神様。」

ていうか旦那、お前神様の癖してエルクのこと見つけらんねぇなら俺が説教してやろうかコラ、とぶつぶつ呟いて、けれどそれも次第

に虚しくなって溜め息を吐く。

ゴロリと地面に寝転がるが、どうやら興奮しすぎて眠れそうにない。

畜生、と悪態を吐いて、元勇者は静かに寝返りを打った。

勇者様の受難（後書き）

勇者の事情がかなり入っちゃいましたが、まぁ何となくあの二人の実態？を理解していただけましたかね。

魔王に関してはまた後で別話としてあげます。というか書きたくてうずうずしております。

あ、ちなみに女性です。

リコールの準備はお済みですか？（前書き）

多少の流血？表現ありです。

一応“勇者様の～”とリンクしております。

リコールの準備はお済みですか？

「――ようこそ、勇者さん。」

ノックもなしに部屋へと飛び込んできた青年とそのお供たちに、あたしは嫣然と微笑んだ。全く…相手が魔王だからって礼の一つもつくせないのはどうかと思うんだけどね。

頬杖をついてイスにゆったりと腰掛けたままでいると、あたしのような女が魔王だという事実への驚きから復活したらしき彼らがやいやい言ってくる。あらあら、喋る前に攻撃の一つもしなさいってのよねぇ？思いながら指でつい、と空をなぞると、彼らはピタリと喋るのを止めた。あはは、大したことないこと。そのままくるくると宙で指を回すと…彼らはゆっくりと部屋の中心へと集められていく。

――1人を、除いて。

「な、何を…？」

不思議そうに口を半開きにするのは、いいけれど。こういう時にあたしを叩くのが戦いのセオリーじゃないのかしら？あたしは戦うのは余り得意ではないから、よく分からないけど。

「さて、と」

問いには敢えて答えないまま一行に顎をしゃくってやると、頷いたヴァルド――あたしの部下で魔族なんだけど――が、彼らを外へと運び出しに行った。

「！あんた！」

「あぁあぁ、そう気色ばまないでちょうだい。戦うつもりはないの」
「え…？」
一気にいきり立ったはずの勇者さんは、怪訝そうに構えた剣を少し下げた。なんだか気が抜けるわ。――…まぁ、ともあれ。
「戦闘ではない、そう…、きわめて政治的な話。外交ね。」
戸惑う勇者さんにこりと笑って、告げる。
「――有沢龍斗さん、我々と取引をしませんか？」
さぁ、準備を始めましょう。

リコールの準備はお済みですか？

ドォン、と大きな音が城内に響いた。何事だ、敵襲かと兵士たちは

色めき立つが…しかし。

「ごきげんよう、人間の皆様…」

ふ、と王宮の廊下で上品に微笑むのは見知らぬ女であった。ただ城に訪れたならばきっと丁重にもてなされたに違いない、高貴な雰囲気すら纏う美女だ。長い黒髪に理知的な青の瞳。誰もが感嘆の息を吐きたくなるようなその美しさに不釣り合いに―…彼女の背後の窓は割れ、そして。

「…怪我は？」

「大丈夫よ、」

傍らで心配そうにするのは、明らかに、人間ではない。形は人のそれでも禍々しい気を纏う、魔族の男だった。

「な、んだ貴様ら！」

「魔族…！勇者、リュート様は…、」

「バカ、リュート様は旅に出られている！」

「クソ、こんなときに…！」

慌てて剣を構える兵士たちにも、女は眉一つ動かさない。そうかあの勇者は、と頭の中で少しだけ考えて、けれどすぐに小首を傾げて…笑う。

「少し、出る場所を間違えたわね…。移動しましょ」

「あぁ。―…こいつらは？」

「ムダに消すのはよくないわ。とりあえず、」

つ、と女が宙で軽く指を振ると、兵士たちは一点に集められた。ハッとして動こうともがけど、空間ごと拘束された彼らは動けない。またね、と目を細める女が消えたのを、誰もが為す術もなく見つめていた。

＊

「さて――…こんにちは？」

静かに微笑み視線を向けても、王の顔色は優れない。困ったわ、突然部屋に現れたのがいけなかったのかしら。…なんて、それだけが理由ではないのは知っているけれど。ひ、ひ、と息をもらし背後の壁にはりつく王にため息を吐く。何にしても、視線が自分ではない人間にばかり向いているというの、あまり好かないのよね。

パチンと指を鳴らすと背後で鍵の閉まる音がして、王は悲鳴じみた甲高い声を上げた。怯えた視線がこちらに向いたのを確かめてから口を開く。

「ごきげんよう、王様―…。あたしはユラ、現職魔王、よ」

「…そ、そんな筈はない！」

最上級のあたしの笑みに一瞬見惚れていたようだたったけれど、王はハッとして叫んだ。まぁきっと、勇者―…龍斗はそんなこと言わなかったでしょうしね。だから旅になんて出たのかしら？

「あら、なぜ？」

いかにも分かりませんという顔で目を瞬かせ首を傾げると、吃りながらも王は言った。

「き、貴様は…、勇者であるリュート様が倒したはずだ！一行の者もそれを確認している、生きているはずがない！！大体、お前のような女子（おなご）が魔王など、」

「侮らないでくれるかしら」

刹那。

抜いた短剣を首筋に当てひたひたと動かす。確かに肉弾戦…ていうか戦闘全般得意ではないけれど、元の世界ではお嬢様だったもの。護身術くらい習得してるのよ？首を動かさずに横目でそれを見つめる王の様子は見ていて楽しいが、汗が不快。伝ってくる冷や汗にあたしは眉をひそめた。

「女だから？…何かしら。――そういう物言い、大嫌いなの。」

「ヒッ…！」

「――ユラ、」

顔を近づけ目を細めたあたしに、寄り目になる王。それを少し非難するような声を上げたのは、

「……ヴァルド」

「目的を忘れるな。早く用件を済ませろ」

という割にはこちらの事情には殆ど興味なさげに欠伸をもらすヴァルドに苦笑する。早く帰りたいだけなんでしょ。

「そうね。――…じゃあ、王？」

「は、はひぃ！」

呟き短剣を首からはなして一歩下がる。ぺたんと尻餅をついた王は、こういう場面に慣れてないわけね。

「――…あなた、私の下につきなさい」

「は…？」

見下してそう言ったあたしを、王は呆気にとられたように見上げた。どうしたの、理解できない？と、敢えて不思議そうに目だけで問いかける。
「な、にを言っている！！仮にお前が魔王だというのは、信じるとしよう。しかし、魔族の者の下につけだと…！」
信じられないと首を振る、なんて。死と隣り合わせじゃないと危険に気づけない愚か者なのね。そういうのってスマートじゃないわ。

「…ユラ、」
イライラと再び短剣を握り直すと、諌めるようなヴァルドの声。…お見通しって訳ね。
「はいはい分かってるわよ。…王、それはつまり、我らが大国に対抗するということ？」
しょうがないから顔を引き締めて、国王に問い返す。返って来たのはどうしても隠しきれない異種族への侮蔑のイロ。
「は…、大国だと？魔族など、まとまりのない村ともいえぬ集団であろうが。こちらには勇者殿もおるのだぞ。あの方が戻ってさえくれば、貴様等など…！」
虚言妄言大言あと虚勢を張るのはどうやらお得意なご様子。――だけど。
「“村ともいえない”？…本当、嘗めないで欲しいわね。あたしが魔王として君臨する以上、そんな状況にはさせないに決まっているでしょう」

やれやれ、と大仰な動作で両手を広げ肩を竦めてから、左手でつう、と宙に円を描く。するとそこの空間に穴があいて、あたしはやおらそこに手を突っ込んで漁った。ないなとしかめっ面をしていると、凄く嫌そうなカオをしたヴァルドがぼそりと呟く。
「…何度見ても慣れん。気持ち悪い技だ」
感心したように言わないで欲しい。

「失礼ね、全く…と。あぁ、これこれ」

けれどそんなことは気にせずに、あたしは驚く王の前で神を広げて読み上げる。

「えぇ、と…。――“バレティゴ王国国王陛下殿。急なお手紙となり誠に申し訳ありません。しかしこれは急を要する用件であり、慌て筆をとった次第にございます。突然のことに戸惑われるやもしれませんがこれは人類としての大いなる進歩であり、またユラ王と共に国をまとめ上げてゆくことは必ずや平穏への道に繋がります。つきましては”…―」

そこまで言ってパチンと指を鳴らす。空気が微かに疼くように動いて、巻き起こる風が髪を凪いだ。

「――どうかご英断を？陛下」

轟、という強い音。

強く吹いた風と共にあたしの長い髪と、それから大量の紙の束が宙に舞った。ヒラヒラと舞い降りてきた紙の一枚を慌てて掴み、王は、そして絶句する。

「な…、ステルフォン帝国、ノイラド共和国、それにマリドナ公国だと…！？」

その手にあるのは全て、そう、王国への“英断”を求める手紙。

「分かってもらえたかしら？大小３０の国家、この世界の主要な国の全てが―…我々の“側”についている。あなた方を、除いてね」

クスリと笑うと、王はかすれた悲鳴のような声を上げた。

「そんな、バカな！戦争が行われた様子などない、なのにどうして……！」

「ええそうね、だって戦争はしていないもの」
「、は…？」絶句する、年老いた権力者。危険すぎるこの世界にいると、何事も暴力でしか解決できなくなるのかしら。やっぱり中庸が一番よね。…けれどこれは、この絶句は、当然の事かもしれない。地球という枠ですらこんな風になることはこの先もきっとない。
「まぁでも、今日はそんな話をしに来たのではないのよ、…“中枢の狸”さん？」

ふわりとまた笑顔を浮かべ、博愛主義的に両手を広げる。笑顔は外交において凄く大事よ。言葉が通じなくても簡単に行為を示せるから。ま、それでもその裏の裏を疑って行かないといけないのがこの世界なんだけどね。
「既にそれらの国は、ベルフィオラ連合王国として一つになっている。…さて、３０以上ある国々の中で最も広大な領地と権力を持ち、大陸の中心に位置するバレティゴ王国、国王にここで問題です」

いち、と口の形だけで呟いて、あたしは指を一本だけ立てた。
「…“中心”、“中枢”に位置する王国は、全ての方向からの侵略を防がなければなりません。それは可能でしょーか？」
「貴様…っ！」
憤りぎりっと奥歯をかみしめる王にに、と口の端をあげると、ちらりと視界に写ったのは、窓の外を退屈そうに眺めながら欠伸をするヴァルド。あなたさ…抑止力って自覚あるの？

「幾ら世界最大の国とはいえ、その他全ての国相手に、勝つことなんて可能でしょーか？」

敢えてのアホっぽい語尾。ニコニコと二本指を立ててあたしは一心に王を見詰めた。
「そうやって、他の国も…！」

「あぁ、何か勘違いしているようだけど、こんなことはしていないわ」
こんな乱雑な方法は…ね。
さん、と言ってまた一本指を立てる。これはさっき思い付いたんだけどね。

「…しばらくしたら帰る、と告げた勇者サン。だけどその行き先は？理由は？しばらく、は…どのくらいかしら？」

ザッと青ざめる王。それはそうよね、勇者さんがいなければこの国の戦力は半減。魔族に対抗しうる人間など、そうそういはしないもの。ま、今までずいぶんなことをしてきたわけだからそのツケが回ってきたんじゃないかしら、と他人ごとの様に心の中で意地悪く笑って。あたしはまた首を傾げた。

「あたしは第72代魔王、由羅・V・ベルフレイン。全ての質問の答えを知って、それでも我らに立ち向かうというならば。――……」

べろり、見せつけるように唇をなめる。

「連合国全て、受けて立つわ。思うまま蹂躙してアゲル。」
「…っの、悪魔…！」
「あら、失礼ね。ただあたしは、この世界をより良くしようとしているだけ。」
「何がっ……！野蛮人ごときが為政者の真似事など、片腹痛い」
わ、と言う前に、その首はゴトンと音を立てて床に沈んだ。あら、と目を瞬かせると、それからため息を吐く。後ろを振り返ると、とんでもなく不機嫌なカオをしたヴァルドの手が血に染まっていた。
「…野蛮人では、ない。それは寧ろこいつらの方だろう」

何か弁解は、というようにじとりと睨むと、観念したのかヴァルドは顔を逸らしてようやくそれだけ言った。あーあぁ、血が付いちゃったじゃない。ハァ、とため息を吐くと、ヴァルドの肩が微かにピクリと震えた。たぶん無意識だけど。

「…まぁ、いいか。民衆の怒りとか…まぁ、うん。なんとかなるわよね。というか、むしろ金食い虫を倒したワケだし…、感謝されるくらい？――あ、そういえば、王は確か入り婿…。王族じゃないのなら、王妃さえなんとか出来れば、うん。よし、――」

顎に手を当ててブツブツと思案して、やっと考えがまとまり顔を上げる。ヴァルドは胡乱げなカオだったけど、自分が計画を狂わせたことは自覚しているのか何も言わなかった。でも別に、コレも選択肢の一つではあったしそんなに狂ってはいないのだけど。

横に放置されたままの首を拾い上げて目線をあわせる。びちゃ、と足元で嫌な音がしたけれど、仕方がない。でも服が汚れるのはさすがに嫌なので首の止血。

「――…あたしは、異界より来たりし魔王。ドイツ系日本人貴族ベルフレイン家の次女にして、そう…力をもって国の頂点に立つはずだった人間。――――あなたとは、」

ひたり、乾いた口唇をその額に会わせると、その部分がボウッと淡い青に発光し、宙に浮かんだ。それを見て静かに笑い、踵を返す。

「格が、違うのよ」

――さぁ、世界征服といきましょうか。

（強いのは、体だけではないでしょう？）
（“ただの暴力”でしかない力は…嫌いなの）
（だから“そうでない力”を、ね？）

リコールの準備はお済みですか？（後書き）

出来は悪目でした。ちょっと「いやな予感～」と被っていますが、これはあっちを考える過程で思い付いたなので内容が薄いですね。

とりあえず設定はまだまだありますが人物設定を下に。

《由羅・Ｖ・ベルフレイン》
近未来の日本出身、ドイツ系日本人。貴族のお家のお嬢様で、昔は政治家を目指していただけあり努力派の才女。今は周りの魔族のお陰もあってそうでもないが、恐らくそのまま現世にいたら独裁者になっていた。金持ちだけど偏見は何もない、究極の実力主義者。でも見下しはする（誰でも）。
黒髪碧眼、顔よし頭よしスタイルよしのまさしくイイ女。でも少し考えが至らず精神年齢が低い。ただし残酷ド外道。

…こんな感じです。魔王召還についての設定がまだまだ詳しくあるので、後でｕｐしようと思います。

ここまで読んでいただきありがとうございます。誤字脱字、指摘などありましたら是非ｍ（＿＿）ｍ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4587y/

シュレッダー予備軍

2011年11月21日22時45分発行